

今月の題字
金子淳二さん

(桐生市新里町)

みどり市内の小学校長や教育研究所所長を歴任した金子先生が精魂を傾けた大間々レスリングクラブが創立30周年を迎えました。おめでとうございます。

虹の架橋は足利屋・さくらもーるアスクが毎月1日発行する地域新聞です。

虹の架橋

第279号

平成30年11月1日発行

企画・編集 松崎 靖

発行 (株)足利屋洋品店

みどり市大間々町4-1380 (〒376-0101)

Tel 0277-73-1212

Fax 0277-70-1066

虹の架橋

検索

で、インターネットからでもご覧いただけます。

小耳にはさんだ
いい話
(文責・靖)
《279》

役にたたないものが役にたつ

『路地のあかり』(松崎運之助著・東京シュレー出版)という本の中に「役に立たないものが役にたつ」という示唆に富んだお話がありました。

「：屋久島の自然のなかで、一番感動したのは樹齢二千年を超える屋久杉の巨木です。屋久杉は標高千メートル以上の栄養の乏しい花崗岩の山地に育ちます。そこは風速六十メートルの突風が吹き、一日に千ミリもの雨が降り、冬は雪に凍える厳し

い自然環境です。そのため、屋久杉の成長は遅く、年輪が詰まって材質が緻密になり強度が強い。また樹脂も一般の杉の六倍以上も多く出して腐りにくくしているそうです。今に残る屋久杉の巨木には大王杉、紀元杉、弥生杉、縄文杉などの名前が親しみを込めて付けられています。

屋久島観光バスのガイドさんが乗客に聞きました。「屋久杉の巨木は、なぜ今まで生き延びることができたのでしょうか？」誰もが答えに窮しました。ガイドさんの答えは意外でした。「それは役に

たたない木だったからです」

屋久杉は五百年余り前から伐採されはじめ、幕末までに七割が伐採されたといわれています。今残っている巨木は、木材にするには形が悪く、曲っている敬遠されたもの。つまり、木材として役にたたないから伐採されずに生き残ったというわけですね。人間に見捨てられた巨木は、たくさんの植物たちの安住の場所にもなっていたのです。

厳しい環境を生き続けること数千年、今、世界遺産のスタートとして名前を付けられ、人間に感動を与えています。不格好でも生き続けることによって命を輝かせ、たくさん

松崎運之助先生は元夜間中学校の先生で、山田洋次監督の映画『学校』の主人公のモデルでもあります。

先日、松崎先生が主宰する「路地裏の会」の四十六名が大間々を散策し、なごめ余興場で「路地裏フェスティバル」を開きました。

優しい、温かさ、いとおしさに溢れた人たちでした。

大間々町小平に嵯峨宮という神社があります。後嵯峨天皇と所縁のある神社で八年後には創建七百年を迎えるそうです。急な石段を登りきると祠の前に二本の巨大な杉の御神木が参道を塞ぐように聳え立っています。

江戸時代の書物に、「誰にも語らず、願い事を紙に書き、それを嵯峨宮の地中に埋めて成就を祈る」という記述が残っています。「語らざる願い地に埋め春ぞ待つ」という句に従い、秋祭の日、願い事を紙に書いて託しました。

狭い祠で氏子の人たちと車座になり、小平の秋を楽しみました。



去年の自主清掃に集まった人たち

昨年の掃除には、(株)ミツバ、赤城工場、第四区体育振興会・婦人会、ながめ黒子の会、みどり市観光ガイドの会、要山を愛する会、桐生大間々支店、しのめ信金大間々支店、みどり市倫理法人会、郷土を美しくする会などの企業や団体の他、家族揃って掃除に参加してくれた人たちが数百人以上が爽やかな汗を流しました。掃除は、掃除をした場所への愛着や誇りや連帯感も生まれてきます。

毎年十一月三日は大間々が一年で一番来訪者で溢れる日、「人も自然も美しい町」と感じてもらうためにも多くの方のご参加をお待ちしております。

ゴミ袋は市からいただきましたが掃除道具が不足しているので、できれば各自でご持参下さい。



世界一小さな 足利屋

トイレ美術館

今月の絵《279》

筑井孝子さん『前橋バラ園』



星野富弘さんは中学校の先生になつてすぐ、部活の指導中にケガをして手足の自由を失いました。入院中に絵筆を口にくわえて絵を描いていた頃、当時画学生だった筑井孝子さんは二年間、富弘さんのお見舞に通ったそうです。その頃のエピソードが、来年から桐生・みどり市の学校で使われる道徳の教科書に載っています。

足利屋とアスクでは、毎年好評の筑井孝子さんの水彩画カレンダー「ふるさと群馬の風景」2019を差し上げます。ご希望の方はお気軽にお申し出ください。(先着二百名様)

靖ちゃん日記

十月十八日(木)
昨日と今日で「近江商人のルーツを巡る研修旅行」に行ってきました。バスで八時間。大間々の国商店の本宅がある滋賀県日野町の家まで、八代目の国社長に案内してもらい、夜は日野商人ふりこ館長の国井さんとアメリカ人のモーアさんも参加して、十六人で郷土料理と地酒で盛り上がった。モーアさんの日野の町づくりへの熱い想いに感動した。ホテルの展望風呂で居眠りをしてしまい、溺れそうになった。今日は伊藤忠記念館や五箇荘の街並みと歩き、広大な塚本善左衛門さん宅で「三六よし研究所」の人たちと、二年ぶりに再会。近江商人の歴史と精神と高い志を学んだ。帰りは高速で七時間、二日間を振り返るとしたか、昨日のことさえ思い出せない。若者と年寄りの違い、という笑話がある。若者は高速道路を暴走し、年寄りには逆走する。若者は恋に溺れ、年よりは風呂で溺れる。何も知らず、いかに若者、何も覚えてないのか年寄り。

嵯峨宮や氏子車座秋祭

大間々町小平に嵯峨宮という神社があります。後嵯峨天皇と所縁のある神社で八年後には創建七百年を迎えるそうです。急な石段を登りきると祠の前に二本の巨大な杉の御神木が参道を塞ぐように聳え立っています。

江戸時代の書物に、「誰にも語らず、願い事を紙に書き、それを嵯峨宮の地中に埋めて成就を祈る」という記述が残っています。「語らざる願い地に埋め春ぞ待つ」という句に従い、秋祭の日、願い事を紙に書いて託しました。

狭い祠で氏子の人たちと車座になり、小平の秋を楽しみました。

